

トランスジェンダー

をいきる

(2)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期 1

これから 2 回にわたって、私の幼少期のころの「自己物語の記述」を分析する。1 回目は、私が小学校に上がるまでの時期を中心に、すでにジェンダーが男の子であると確信した事柄について記述する。

(1) 「俺は男の子や」

性自認は 1 歳半ごろから

私は 1971 年 3 月 9 日に、「視覚に障害のある女の子」としてこの世に生を受けた。少なくとも祖母や両親たちは、私をそのように見て疑わなかった。

ところが、視覚障害に関しては、あちこちの病院を駆けずり回った結果、一生背負っていくものとして確定したのだが、「女の子」という性別に関してはすでに 2、3 歳ごろには反発を覚えており、「自分は男の子である」と認識していた。

性科学者のジョン・マネーは、「自分の性別がどちらに属しているかを認識する（性自認）は、だいたい 1 歳半ごろで確定し、その後の性自認の変更はできない」としている。そうだとすれば、すでにこのころから、男の子であると確信していた事実が、より鮮明に確かさを持って、当時の私に迫ってきた、ということになる。遠い記憶だが、確かに反抗しがたい力によって、自己の性の方向性が、他者（主に女性）とは異なった方向に引きずられ

ている、という感覚を、おぼろげながら抱いていた。そしてこのことが、後に詳述するさまざまな行動様式における不一致や違和感を生じさせることになるのである。

2 男の子としての3台要素がもたらしたもの

私の「男の子としての3台要素」は、「寡黙」、「過活動」、「行動化」であった。2、3歳ころの男の子なら少なからず持っているこの3台要素は、すでにこのころからさまざまな場面で発揮され、そのたびに両親や父方の祖母の怒りの原因になっていた。

私には、2歳年上の兄がいる。当時、兄の持っていたおもちゃをめぐって、兄との喧嘩が絶えなかった。兄貴に与えられていたおもちゃは、手動または自動式の車やボール・プラモデルといった、いわゆる心身の活動力を喚起させられるような物であったのに対し、私に与えられたおもちゃと言うのは、人形や果物の模型セットなど、ほとんど心身の活動力を期待できないような物ばかりであった。通常であれば、「お兄ちゃん、それほしい」と言えるのだろうが、寡黙であった私は、兄に、そのような活動力を期待できないおもちゃをいきなりぶつけ、時には噛み付いたりするなどの暴力を行使しながら、自己の男の子性をアピールし、正当化したものであった。

そのような私に対し、両親や父方の祖母は、もっとおとなしく、しとやかでいること、すなわち女の子らしくすることを求めてきた。その度に私は、「俺は男の子や」と心の中でつぶやき、祖母や両親に反発していた。

女の子のいたずらを「おてんば」、男の子のいたずらを「やんちゃ」というが、私のこのような行動は「やんちゃ」に属しており、けっして「おてんば」という表現では足りない。そこには、「おてんば」よりも、「やんちゃ」という表現のほうが、行動力においても、行動様式においても、領域が広範囲であると考えられるからだ。したがって、ある程度大胆な行動様式をとることによって、「おてんば」の領域を超え、「やんちゃ」へと近づきたい、という欲求が、知らず知らずの内に自己の過活動・行動化を促進させ、変わって寡黙という形で、言語によるコミュニケーションを低下させていったと考えることができる。

一方、盲学校の幼稚園に通い始めたころから、私に対して執拗にやんちゃをしかけてくる男の子Aがいた。彼のやんちゃ振りは、普段の私のやんちゃ振りとは明らかに行動の質や量が異なっていた。私は必死でAのやんちゃぶりに抵抗しながらそれでもなんとかAとの間で男の子同士のホモソーシャルな関係を築くための模索をしていた。

しかし、私の行動は、周囲の大人たちの誤解を招いてしまった。すなわち、「仲のよい男の子と女の子」、「喧嘩するほど仲がよい」、「嫌い・嫌いも好きのうち」というように、子供同士の係わり合いの中に、大人たちによってかつてに異性の交際として考えられてしまったのである。私の彼のやんちゃ振りへの抵抗は、「彼からやんちゃをされる」こと自体が、もはや私を男の子ではなく、女の子にさせられてしまうことへの恐怖であり、不本意さであった。したがって、大多数の大人たちの連想する子供同士のほほえましい恋愛ムードか

らは逸脱しているのである。

このようにして、私の「男の子としての3要素」は、周囲の大人たちを困惑させることになるのである。

3 自己の中で構築した「方程式」による男性性形成

私の男性性形成は、もともとの男の子としての性自認に加え、祖母と暮らしていたときの体験が大きなシェアを占めていた。当時、祖母は、両親とのいざこざが絶えなかったので、祖母の家だけ別棟にし、別居していた。2、3歳ごろ、しばらく両親と兄と別居させられ、祖母と一緒に暮らしていた時期があった。そのときの体験が、後に私の男性性形成の中核をなしていくのである。

祖母の口癖はこうであった。「女の子やったら泣きなさんな。女の子はいちいちべらべらしゃべるもんやない。(ええ。なんでえ?) (そんなのありえない!)」どこからか、そのような声が聞こえてきそうなくらい、祖母は私の行動様式の不備な点や至らない部分について、このように叱責した。

しかし、祖母のこのような要求に対して、私は違和感を覚えるようになった。私はどういうわけか、すでにこのころから、男性の演歌歌手の歌を大声で歌うようになっていた。その歌の歌詞の内容やドラマ・漫画などのメディアの要求する「女の子」と、祖母の要求する「女の子」との間に、食い違いのあることに気づいた。例えば、演歌の歌詞では、「男だったら泣いたりせずに」(小柳留美子『瀬戸の花嫁』)や、漫画・ドラマでは、「女の子なんだから、もう少し機嫌よく話をしたらどうなの?」などと、養育者らしき人たちから叱責される場面が見受けられた。すなわち、ここで言えることは、「女の子やったらいちいち泣きなさんな」、「女の子はべらべらしゃべるもんやない」という要求は、演歌の歌詞やドラマ・漫画などのメディアでは、男の子像として要求していたものであった。

その食い違いに気づいたとき、子供心に一瞬どちらの要求を尊重すべきか、と躊躇したかといえそうではなかった。私はまるで、数学の方程式を解くような方法で、祖母の「女の子としての要求」を、すべて「男の子としての要求」に代入し、自己の「男らしさ定義」を構築していった。すなわち、「男の子やったら泣きなさんな」、「男の子やったらいちいちべらべらしゃべるもんやない」という風に、「女の子やったら」を「男の子やったら」に代入することで、自己の「男の子としての性自認」とも一致したのである。

また、「女の子やったらつべこべ文句を言わんとさっさと早くしなさい」、「女の子やったら食べ物の好き嫌いやうまいまずいを言うもんやない」という祖母の要求をそのまま「男の子やったら」に代入することによって、もともと有していた「寡黙」、「過活動」、「行動化」に拍車をかける結果になり、そのことが私をいわゆる伝統的な男性性形成へと導いていったのである。

ではなぜ、祖母がそのようにして私に対して要求する「男の子像」をわざわざ「女の子

像」として置き換える必要性があったのか。

祖母は明治の終わりの生まれの人であった。現在でも「障碍」に対する強固な負の感情だけではなく、ジェンダーに規定された思考パターンの強い社会ではあるものの、私の父をはじめ、3人の男の子を女手一つで育ててきた祖母にとっては、私が「視覚障碍」で、しかも「女の子」であるということ、「社会的な二重の劣等性を持った子ども」として認識した上で、だからこそ将来は独立して一人前にしなければならない、という強い使命感の下、メディアや社会一般に要求される「男の子像」を、わざわざ「女の子像」に置き換えて私に要求したのだろう。したがって、祖母のそうした男の子像から女の子像への「置き換え行為」は、私を将来独立させるための戦略的方法として利用されたものであり、このことが私の「男の子としての性自認」と一致し、ますます男性性を強固にしていっていったのである。

4 終わりに

このような祖母との暮らしを通じて、いつしか私の中に、「男らしさ」、「女らしさ」が、独特の様相を持って定義されていった。例えば、男は感情を表出しないが、女は感情を表出する、男は涙を見せたり弱さを吐露したりしないが、女は涙を見せたり弱さを吐露したりする、男は活動性に優れ、女はそれほど活動的ではない、というように、男女二分法的な仕方で、自己の行動様式を適宜選択するようになった。しかし、このような時代錯誤的な「男らしさ」、「女らしさ」の定義は、その後、数々の体験や人との出会いを通して、脆くも崩壊していくのである。(続く)

うしわかこうじ(立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程)